

15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
光雲2		文香 稀舍香 曆風静		山菜 音思	朝香	光雲2 佳月 ほのる マスミ 鶴城 音思 いちい	荒一葉 たかこ		月を 小麦 修 しんい 史子 喜夫	由美子 ことは 珪子 寒立馬	青夏			
春浅し鋭声（とごゑ）降りくる無言館	絵画展春兆す庭のカフェテラス	鳥雲に入るやレノンの反戦歌 <small>レノンが亡くなり四十年余り、未だ戦禍、人間は愚か。ジョンレノンのイマジンでしようか。ウクライナに侵攻したプーチンよロシアに帰れ。と詠んだ反戦歌である。ジョンレノンが歌う「イマジン」が聞こえてくるようだ。季語が効いている。</small>	片栗の花星の雫のごと咲けり	姉がいて妹がいて雛の客 <small>かわいらしいひな祭りの気分ですね。心とらぐ雰囲気がします。</small>	山笑ふ吊り革の揺れ右左 <small>春ののんびり感がよく出ている。中七、下五の措辞が素晴らしい。</small>	紅梅や蹴出しの覗く神楽坂 <small>蹴出しと紅梅の取り合わせが艶っぽい。地名が粋な景を思わせる。神楽坂にも春を告げる紅梅がふくよかな香りを漂わせている。通りかかった人は芸妓さんか。歩くにつれて覗く蹴出しがなんとも艶めかしい。何とも言えぬ色っぽさ。色街だった昔を感じられます。紅梅、蹴出し（おそらく赤）、神楽坂（赤い提灯）と赤のイメージで繋がっている</small>	寝たきりの妻の痰引く余寒かな <small>寒さまだ続く中、妻の痰を引く姿が目には浮かぶ。大切な奥様の看病、嘸かし大変なものと存じます。奥様への優しく介護のお姿が目に見えます。心からご快復を願っております。</small>	起き抜けの一番東風や犬の供	春寒し迷惑さうな犬の靴 <small>犬の気持ちになりきってますね。歩きにくそうな犬がなんとも…。靴を履かされ散歩している迷惑そうな犬の表情がよく浮かぶ句である。犬の従順さが表現されている一句。犬の気持ちを代弁。犬は本当に迷惑さう、でも、言えない犬の気持ちの悲しみが伝わります。</small>	奥能登の岩削ぐやうに海苔を摘む <small>奥能登でこの風景を見たことがあります。本当に句の通りだなと思いましたが。まだ寒風の吹きすさむ奥能登、「岩削ぐやうに」の措辞に魅かれました。中七の描写がリアルで面白い。季語が活かされ、春の気配がある奥能登を思えた。</small>	春耕の機嫌よろしき鋤の先 <small>春到来に弾む気持ちがよくでている。</small>	埋火を起こす気配や腕枕	くれくれと3月の道歩き抜く	ピラルクに会いに二月の水族館
丸山マスミ	本橋稀香	ほのる	かげろう	檜鼻ことは	石関六弦	森美枝子	森佳月	秋谷風舎	池田珪子	河野凡士	荒一葉	みづる	新井史子	古賀由美子

30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16
ほのる		凡士	六弦	美枝子		小麦 山菜 道を 寒立馬		いちい	由美子 月を 小麦 青夏 ほのる ひろし 六弦	史子 寒立馬		稀香 道を 京子	月を しんい	
豆撒や鬼を何処まで追へばよし 心に棲む鬼を感じた。	盆梅を一晩泊めて軸の元	バス待ちの駅の北口牙返る この句を見てすぐに「しぐるるや駅に西口東口」安住敦が浮かんだ。	泡ひとつ残せし甕の春氷 季節の変り目を繊細に描いた綺麗な句です。	屏風絵の嶺々（ねね）より聞こゆ春の声 屏風絵からも麗らかな春を感じます。	折々の秘めごと褪せず座禅草	日向ぼこ飛行機雲の消ゆるまで 飛行機雲をずつと見ているのどかな感じと日向ぼこがよく合っている。 日向ぼこしながら飛行機雲を見ている長閑な時間がたまらない。長閑 な春のゆつたりとした時間を上手に詠まれている。日向ぼこの茫洋感 が、実感として伝わる。リズムがいい。	梅が香や玉石交じる陶器市	鬼打ち豆妻の眼にたぢろぎて 「鬼は外」と言いかけてドキッとするのがわかります。ユーモラス。	目隠しを解かれ微笑む官女雛 一年に一月くらいは逢瀬。出す人も出される雛もうれしいでしょう。 官女雛への慈しみを感じます。1年間目隠しをされていたという言い回 しが良い。上品な様子も微笑んでいるようだ。表現がうまい。上五・中 七が見事に季語を立ち上げている。思い浮かべてこちらでも微笑んでしま う、春らしい句です。	廃線のレールの続く雪野原 無人駅の春の景が目の前に広がるよう。涙が出るほど悲しい光景を17 音全体で語っている。	抜路地の連翹明る過ぎかとも	春の星記憶をたどる母とみて 記憶が朧なお母様を優しく見守っているご様子、春の朧な星との取り合 わせが良いです。「春の星」の季語が上手く働いています。季語の本意 を言িয়েて新しい。	一審無罪二審懲役猫の妻 中七で切つて解釈すると緊張と弛緩の妙でしょうか。猫の恋を面白く表 現なさいました。	饒舌な総理大臣春寒し
渋谷きいち	新暦文	俳翁	後藤允孝	岡本たか子	望月のぞみ	立野音思	反町修	網野月を	光雲 2	倉田詩子	しんい	青木鶴城	森下山菜	西村青夏

45	44	43	42	41	40	39	38	37	36	35	34	33	32	31	水明インターネット句会（選句・選評） 令和五年二月
山菜	きいち	みづる		夫 鶴城 俳翁					のぞみ 京子		道を ひろし 六弦	珪子		きいち 美枝子 修 鶴城 かげろう	
立春に生まれし吾子の太き眉 2月4日生まれのお子さん、いえーい、かつこいいぜ！	夜雨かさねがよいです、青い稜線を歩きたいです。 夜雨かさねがよいです、青い稜線を歩きたいです。	遅刻したプラットホームに冬日向 口語調がやや気になるが、景がありあり浮かび、のどかさがリアルに伝わってくる。	日を惜しむ巢鴨銀座や針供養	日の本を担ぎし肩や二日灸 年2回の灸では癒やせない肩凝りの日本、皮肉が効いています。「日の本を担ぎし」の誇張が効いている。灸の効果に期待。サラリーマンのがんばった双肩。お灸で癒してやりたい気持ち。わかるなあ。	運休を知らずホームに春の雪	黙々とカフェでパソコン春寒し	凍てゆるむ無沙汰の友と爛酒と	電話帳日永一日ながめおり	霜柱土押し上げて意地通す 大地の力強さを感じる。通俗的になるところを下五で決めました。	春気より伸びる伸びるや莢豌豆	書きかけの原稿用紙春の雪 空間を見事に詠んでいる。ふと顔を上げると雪、原稿の続きが楽しみみです。	夫に買ふピンク地のシャツ寒開くる そのシャツをお召しになったご主人とお散歩にでもお出かけ下さい。	磯竈歯抜け顔なる大笑ひ	ポン菓子の爆ぜて春空震はせり 昭和生まれには懐かしく、あの音には驚きました。ポン菓子と春空の取り合わせが良い。のどかな春空を突然震わせるポン菓子の爆音の大きき。昔を彷彿とさせる。小気味よい音が聞こえてきそう。	
古賀由美子	新井史子	石田春香	山中いちい	染谷風子	日高道を	野田静香	寒立馬	持永喜夫	霜里	清川徹斎	後記朝香	木村小麦	小林京子	龍野ひろし	

60	59	58	57	56	55	54	53	52	51	50	49	48	47	46	水明インターネット句会（選句・選評） 令和五年二月
	凡士	史子	朝香		たかこ 京子		凡士 荒一葉	由美子 みづる		ことは 風舎				きいち 暦文 みづる 風舎 青夏 珪子 マスミ 朝香	
せせらぎと日かな語らふ春彼岸	藪椿平飼ひの鶏自若たり	掘り起こす土ふつくらと春めける	春光をちりばめ気まま風見鶏	もはや訪ふ祖母亡き庭の梅真白	ふつつつと二十歳の記憶シクラメン	冴返る看板だけの座り込み	空瓶に異国の文字や東風の浜	惑星のななめに集ふ春の宵	緩やかに山路を正す野梅かな	スイートピー勝手気ままに咲いてをり	薄氷の鳳凰堂を映しけり	のどけしや眠りしままに笑ふ孩子	薄氷や黒レザックに目打刺す	村ひとつ初音の中にありにけり	
青木鶴城	丸山マスミ	西村青夏	ほのる	本橋稀香	檜鼻ことは	かげろう	森美枝子	石関六弦	秋谷風舎	森佳月	河野凡士	池田珪子	みづる	荒一葉	
	子供の頃我が家も十羽ほどが庭を我が物顔で動き回っていた、貴重な栄養源だったが、今でもそんな家があるとは羨ましい。	今年も、土いじりをする者だけが知る春の到来。	春のキラキラ感がよく表現されている。中七、下五の措辞が良い。		シクラメンの花を見ていると、二十歳の記憶が次々と蘇る。楽しかった事も苦しかったことも、今は皆なつかしい。ふつつつとのおのまとへ、シクラメンの幹旋ともに新鮮です		日本海特に能登の早春の浜は、ハンブル文字の漂流物で溢れていた、そんなことを思い出させてくれた。								

75	74	73	72	71	70	69	68	67	66	65	64	63	62	61
静香 かげろう	いちい	允孝 修 かげろう		光雲2 ひろし	允孝	佳月		俳翁 たかこ	荒一葉			暦文	允孝 音思	佳月 ことは 稀香
春の闇ダリの魔法にかけられて <small>一味違う春の闇に感動。サルバドール・ダリの混沌とした絵を魔法と表現したのがよく、季語とも合っている。</small>	牡丹の芽童女賢き眼かな	風光るレンタサイクル二人乗り <small>やつと春が来た感じがする俳句ですね。上五の風光るが良いですね。春風の中を走る二人乗りのサイクルリングの楽しさ。季語が活きていていい関係であろう2人の明るい表情まで見えてきそう。</small>	野梅ちる暫し停まりて乳母車	微睡みに鳥の奏づる早春譜	山路来て急く足止むる初音かな <small>初音を聴くとついつい足を止めて木を眺めるようになり、その情景がこの句にはあります。</small>	露味噲や犬逝きて我生き難し <small>ペットへの愛情がしのばれる。</small>	抜くる程の青空雪の富士山よ	満杯のダムの放流雪解水 <small>満杯になったダムの放水、今ならではの雪解水である。ごうごうと雪解水によるダムの放流の豪快さが目に浮ぶ。大変良い作品である。</small>	山越へて汽笛かよふや寒日和	原子炉のウランの叫び春の闇	天気予報に寝不足となり春の雪	艶ませる終の住処の実万両 <small>終の住処の真つ赤な実万両に元気を貰う。</small>	石仏の微笑み濡らす春の雪 <small>下五の春の雪は水分を相当に含んでいます。恰も涙を流しているようにも見えます。淡い雪の感じがでています。</small>	春ごたつ浪花千栄子はしんだふり <small>浪花千栄子が懐かしい。死んだふりをしよう。浪花千恵子さんの美しい大阪弁を思い出しました。俳諧味たっぷりです、浪花千栄子を知っているなんて、自分も年だなと……。</small>
龍野ひろし	小林京子	新暦文	渋谷きいち	後藤允孝	俳翁	望月のぞみ	岡本たか子	反町修	立野音思	光雲2	網野月を	しんい	倉田詩子	森下山菜

				86	85	84	83	82	81	80	79	78	77	76	水明インターネット句会（選句・選評） 令和五年二月
					のぞみ	俳翁	マスミ 喜夫					しんい 美枝子 のぞみ		静香	
				嬰兒にも雑木の芽にもある生毛	節分や心の鬼に豆食わす	忍ばせる香り袋や春浅し	水を吸ふ森に音あり春兆す	飼ひ犬の言葉が分かる春の夢	料金の値上げの文字に春寒し	春近し土の匂いに時を知る	春気より伸びる伸びるや莢豌豆	亡き人の衣解く夜の虎落笛	大量に買い占めたるは落の臺	子ら漉きし卒業証書青き空	
				染谷風子	石田春香	山中いちい	野田静香	日高道を	持永喜夫	寒立馬	清川徹斎	霜里	木村小麦	後記朝香	

一生残る卒業式になるでしょう。

季語が効いています。季語の幹旋がしみじみ感を感じます。亡くなった人を偲ぶ夜、悲しみが溢れている。

春めいてきたある日、森に足を伸ばす。森はまだ寒々としているが、木を抱いて耳をあててみると水を勢いよく吸い上げる音がして春の兆しを感じた。春の息吹が吸う音で感じられ秀逸。

充たされない恋に身を焼く女が帯に忍ばす匂い袋、春にはまだ遠い思いに悶える。

誰にでも、心に鬼がすんでいる。